

ることのできる社会になって欲しい。そして文化の交流を初め、互いに幸せな人生を求め合っていると思う。

〔編注〕

片山衛真氏の手記（その一）は、第XI巻に掲載されております。

【執筆者の紹介】

住 所 岡山県北方

生年月日 大正十四年一月十四日

学 歴 三野小学校卒業

軍 歴 第二三八部隊ハタイ隊 軍属

関東軍第三六二部隊第九中隊 昭和二十年

三月九日入隊

入 ソ 昭和二十年九月十六日 クラスノヤルスク

帰 国 昭和二十三年十月七日

現 在 土木会社に勤める

（岡山県 妹尾 正一郎）

追 想

静岡県 藤 田 悦 郎

はじめに

この追想記は、当時の記録が一字一句もないので、四十年ほど経っての「記憶」を頼りに書き上げたものであるから、日時、人名、人数等誤りが多少あるかも知れないが、うそのつもりはない。軍隊生活は十カ月で、しかも大事な時期に三カ月ほど練兵休をやり、兵隊生活・訓練を休んだので、軍隊特有の言葉・習慣が身に付かず、中途半端な言語、表現が記述中数々あるがやむを得ない。また、軍隊生活は日本人幾百万の人が経験しているので殊更書く必要もないと思ったので、ただ自分に関した事のみ書いた。

なお、また、ダモイの港、ナホトカの様子も幾十万の人が同じ経験をしているので省いた。

文中、人名は、佐藤大隊長に読んでいただく意図を

持っていたので全部実名である。

(佐藤さんは、平成十一年現在九十四歳で健在である)

満州第一一九師団第二五三連隊第一大隊(佐藤隊)

連隊長 三浦敏雄大佐

大隊長 佐藤与三郎少佐

大隊副官 石川一郎少尉

内務係 谷口安史曹長

昭和二十(一九四五)年八月九日午前五時過ぎ、不

寝番最後立つ。連隊本部より大隊本部中隊電話に「非常」と一言通報あり、ソ連参戦を報ず。連隊は直ちに出勤準備に移る。各種戦備装具の受領にゴッタ返す。

九時頃、ソ連爆撃機五十機と三十機の二波、ハイラル市街と各部隊を爆撃し、市街及び部隊を破壊炎上。しかし我が部隊は爆撃を免れる。

午後六時頃、部隊は第二大隊長花園連隊長代行の指揮により興安嶺に向け撤退開始。

本部隊は出発したが、一部は某准尉を長として六百

人、東山陣地守備のため残る。また、私は大隊本部三人、山田軍曹、藤田悦郎、片山敏幸、各中隊二名計二十四人、の兵で残務整理班として本隊を見送り、午後十時頃、各三人くらいの班で石油カンを受領、兵営内各兵舎(二階建て各二個中隊入居)に火をつけて焼く。残留組の長は准尉一、副は佐藤隊の山田九州男軍曹。軍曹は弾薬庫、防毒被服庫に自ら火をつける。

この時分、ハイラル軍都全域火の海、弾薬庫火災のため各種砲弾火薬の自爆により、いかなる戦闘にも勝る破裂音に天地震動す。

最初の予定では、我々残留組は任務終了後、本隊よりの迎えの汽車かトラックで本隊を追及することになっていたが、迎えは来なく、衛門前に集まった逃げ遅れ民団四、五十人と共に汽車で行こうとしたが機関車が来ず、かつ指揮者准尉と山田軍曹が兵舎の燃え具合を見るため兵営に入ったまま帰ってこないの、衛兵司令の伍長が、「今からおれが指揮をとる」と言って、まず手榴弾を子供にまで二個宛渡し着火の方法を教え、万一ソ連軍と遭遇した場合に備える。

十日午前二時頃までそこにいたが、迎えが来る様子がないので遂に同勢百余人（残務整理班二十二人、衛兵二十余人、逃げ遅れ民団五十余人）、徒歩で次の駅のあるハケまで夜中撤退を始める。実はこの時刻頃、ソ連戦車軍団が既にハイラルに迫っていたのだった（五味川純平の書による）。夜空を焦がして炎上するハイラルを振り返り振り返りしながら、暗闇の草原を手さぐりのように進んだ。

やがて夜が明け、鐵路沿いに行けば、だいぶ実ったキビ畑のかなたの小路を馬に乗った満人達がこなたをうかがいうかがい走って通る。不気味極まりない。鐵路を見ると、ここを通った引揚者の捨てていった品が点々として続く。新しいカバンがある、衣類がある。米、パン等食料品、身の回り品を家を出る時は一応必需品として持ち出したが、だんだん重くなって一品、二品捨てて身を軽くして行ったのだろう。昨夜衛門前で迎えを待っていたとき、子供を背負って、なお生まれて間もない赤子を抱えた民間人が、これからの運命に絶望し、闇の中に入って赤子を刃物で刺し殺すのを

見た。周囲の者も誰一人止める者もなく、ただ暗然として目を背け耳をふさぐのみであった。我々一行はハイラル引揚者としては最も遅い組と思われたが、後から走って来た軽戦車が「ソ連戦車群が後から来る」と言いながら我々を追い越して行った。しかし徒歩の我々はどうにも仕方がない、お互いに励まし合いながら進む。民団の中には小さい子供や老人もいたが、皆元気に歩く。ただ途中で草群の中で呼び声がするので見ると、一人の兵が足に爆傷を受けて担架に乗せられたまま、仲間に置き去りにされ、我々を見て「助けてくれ」と泣き叫んでいた。我々としても見捨てるわけにもいかず、四人交代で担ぎながら行進する。その途中線路上に機関車が枕木を積み重ねた謀略に遭って横転しているのを見る。昨夜我々を迎えに来るはずだった機関車だ。我々としても当然の事態と見て今さら怒る気もなかった。ハケの駅近くなったころ、生死不明と思われた我々の指揮者准尉と山田軍曹が騎馬で行くのと出会う。

彼等は我々が指定の場所（連隊本部前）で待ってい

なかったと言つて怒つたが、当時風向きが変わつて、本部兵舎の炎が我々の方に吹いて来たので衛門前に移動したのだが、彼等はそこに我々がないので仕方なく裏門から出てハケに向かったとのこと。しかし、お互いに無事会えたことを喜びながら十時ごろハケ駅に着く。ここには各地から集まった軍民合わせて三、四百人はいただろう。ここで救援の機関車の来るのを待つ。しかし、来ると決まっているわけではない。貨物列車があるから来るだろうとの希望的観測であつた。そのうちソ連の双発爆撃機一機が飛来、機銃掃射と爆弾数個を落としたが、皆冷静に見守る。被害なし。駅にいて遠くを見ると、遙かな丘陵地を行軍する部隊が見えた。ハイラルを出た部隊であろう。我々はどうせ部隊を離れた者達だから今さら彼らに追従する必要もないので、ただただ列車に乗ることのみ願つて待つ。しかし、ソ連軍も追つて来ているはずなので皆焦っている。中には、鉄道の手こぎトロッコに四、五人乗つて走り出すのもいた。

昼過ぎ、ついに来た。喚声を挙げて貨車に乗り込む

と、汽車は興安嶺に向け走り出す。しかし、少し行くと線路伝いに引き揚げていく人々が意外に多い。その人々を出来るだけ拾い上げながら進む。どのくらい進んだか、そのとき並行した道路を戦車が来て、後方にソ連戦車群が来ると大声で知らせてくれた。さあ大変、今まで一々止まつて人々を救い上げていた列車はもう止まらない。線路わきで叫び立てる人々を無視して一目散に疾走する。乗せてもらっている我々も、情け容赦を口にも心にも感じるゆとりはない。ただただ我が身一つの無事を願つて機関車の尻を叩くのみ。今になって思えば恥ずかしい限りであるが、あれが我々の本性だつたと悟る。時間でどれくらい走つてからか、ある駅に着いたとき、我が本隊に会う。谷口曹長が寄つて来て、無事を喜び合う。しかし我々はそのまま汽車で進む。

興安嶺の我が部隊の守備陣地への登山口駅、ブハトに着いたのは、まだ日も高い頃、そのまま山に入るかと思ふと、どこからかの命令で、残務整理班は駅前の木陰など目立たぬ場所待機せよと言われる。我々は駅

周辺の官舎群を焼くのだと言う。しかしそれも少時で解除され、ブハト郊外の草原に他の部隊と共に腰を下ろして待機していると、情報が入り、ソ連戦車軍団がハイラルを抜いて南下して来ると言う。そこで我々も腰を上げて陣地に向け坂を進み出す。この時、山田軍曹が私に「藤田、おれの槍やりを持って来い」と言われ、折から通りかかったトラックに山田、藤田、片山、三人ほどで乗り、陣地に向け走り出す。山深い陣地への坂道はほとんど立木はなく、道の端には丈の高い美しい花が咲き乱れ、実に美しい景色だった。

薄暮ようやく陣地に着く。そこは山の中腹で、かなり広い平原で、湿地の多い土地の山際で、兵舎は草ぶきの低い屋根で、中に二段ベッドが両側に並んだ簡単な作りで、そこで二晩寝たが、一晩雨が降って屋根が抜け、土と草がドッと寝台に落ち込んできたものだ。

十一日、二晩目、先着の兵士と数人で組んで谷間の崖面をノミを使ってハンマーで叩く。しかし岩が固くなかなか崩れず、発破の穴も何寸という程度でどうにもならなかった。しかし他の中隊の中には随分進ん

で、どうやら洞と言える程度になり、幾日かしてソ連軍が来た時これにより戦ったと後で聞いた。

十二日、この日、昼頃、連隊本部より我が大隊に出動命令が下る。我が本中部隊も舎前に全員整列、陣地守備に残る者と、出動部隊に入る者とに分けられる。

私は陣地守備の組だ。しかし私はこのとき考えた。今までの戦争の報道を見ると、守備隊はほとんど火攻め、弾攻め、兵糧攻めで、結局玉砕？となっている。いくらソ連軍と戦っても勝ち目はない。恐らく今から

一週間ともたない命なら体当たりで戦って死にたいと思ひ、自分の死に方くらい自分で選びたいと班長を経て石川副官に出動部隊への編入を願ひ出た。しかし石川副官は「今度の作戦は行軍が多いからお前では無理だ、あきらめろ」と言われた。(実は私は二月の初めから、銃剣術演習中に相手に足を踏まれて局所が化膿し手術を受け、練兵休を二カ月もやり、治りかけたとき、受け持ちの馬を予防接種に引き出すとき、放馬して引きずられ足首を捻挫し、入院九日と足の故障で三カ月余休んでいた)

しかし私も必死で頼んだ。その間大隊長と副官は連隊本部の命令を電話で受領中で、聞いていると、完全一個大隊編成で武器弾薬は現地支給、方面は中部地帯であると言う。命令受領が終わったころ副官も私に向かい「よし、ついて来い」と言われ、私は早速準備にかかる。それを見ていた石川副官の馬取扱兵で残留組の内田認一等兵が、藤田が許可されたならおれも頼むと副官に願ひ出て、結局二人、守備側から出動部隊に加えてもらった。

夕刻、舎前にて守備隊と出動部隊の決別の杯をビールで行い出発。見晴らしのよい原に出ると大隊長が、先途の善戦を願って部隊携行の全銃砲の一言射撃を実施、氣勢を上げる。

ようやく日が沈み暗くなってきた。興安嶺の陣地を後に山を下る。しかし我々の装備は、約半数の銃兵が鉄砲を持っている外は銃なしの兵が多く、あるいは肉攻用の円盤爆雷、あるいは五キロ、十キロの箱爆雷を携行し、他は二、三カ月の間に急造された槍を持つのみ。私は円盤爆雷だ（しかし私は長い練兵休で肉攻訓

練は全然受けていない、無能の兵士であった。坂の途中でハイラルから徒歩行軍してきた我が本隊と会う。暗い中で戦友の名を呼び合ってお互いを確かめ合う。ここで谷口曹長外幾人かの人達が出動部隊に編入される。私はなじみ深い坂元班長や多くの戦友と別れて山を下る。ブハトの駅で無蓋貨車に乗り込む、大隊長の荷の中には一升ビンが見えた。

十三日、明るくなって出発、汽車はひたすら走る。幾つかの駅を通過するが戦況情報混沌、ソ連機の来襲もない。しかし、どこからか白城子方面でソ連戦車群五〇〇を全滅させたとニュースが流れる。大隊長が、オレの大隊でも戦車五〇〇くらいはやれると豪語する。しかし戦車五〇〇を撃破するのは肉攻班の全力投入であり、言い換えれば大隊の全滅を意味するが、兵も皆そこまでは考えないで笑っている。列車は夜になって途中の駅「昂昂溪」^{フウコウケイ}に止まる。夜間走らないのは、謀略による列車転覆を警戒してのことと思われる。

十四日、一日走る。しかし、空も陸も敵との遭遇も

なくハルビン郊外の駅に着く。松花江に江上艦隊が見られた。この夜も駅で夜を明かす。

十五日、列車は動かない。昼過ぎ、周囲が騒がしくなる。停車場司令部から大隊幹部に集合がかかる。ここで日本の無条件降伏の報が伝えられる。大隊長が酔っぱらって帰って来る。将兵共にホームに下りて携行した銃器をたたきつぶす。悲憤慷慨、身の置く所を知らず。天皇陛下の処置に血涙をもって抗議するもせんなし。しかし一方、戦争の終結により、戦死は必至と覚悟していた心の内に「助かった」という気持ちがいいたのも偽りない事実であった。

皆の動揺も少し静まると、今度は今からの境遇が心配になり出す。もちろん捕虜であろうが、それがどんなものか想像がつかない。ただ、軍人最大の恥辱であり、戦争中なら死に値するものであるが、天皇の命により降伏した今、自ら死を選ぶ理由はない。ただ成り行きに任ずのみ。しかし、どうなるだろう。虚無脱力、ぼう然として貨車の中にうずくまる。

午後何時頃だったか上級者が来て、「ハルビン、東

本願寺別院の邦人警護に十人ほど来い、交代は一時間後行く」と言われ、私もこんな所にいるより良いと思いい、早速飛び出す（本部中隊より長崎八郎、藤田悦郎の二人）。お寺には本堂、他の建物には避難民がいっぱい詰まり身動きできぬ様子。大部分がハイラル関係の人達で、ほとんど女と子供であった。ただ、炊事関係者は男子が二十人くらいいたようだ。境内は一応塀で仕切られていたが、道路側の塀に外から満人達が押し寄せ、長い間の忍辱の恨みをこの期に晴らさんと罵声を張り上げ、破れんばかりに塀をたたく。また一方、利にさとい者達は、何も持たない難民にマクワウリヤカポチャ、トウキビ等高く売りつけに来る。もちろん入り口の門は固く閉めて我々が交代で立哨する。このとき注意したのは、暴徒の侵入を防ぐのは第一だったが、物売りも、青物、果物等生ものは腹を壊すもとであるので絶対買わぬよう注意したのだが、給食も十分でなく、小さい子供を抱えた女達はつい手が出してしまうのだった。

我々は一時間経っても交代が来ないので、そのまま

居ついてしまう。

ここには相当量の米穀と甘味料があり、炊事係の長としてはハイラルの兵寮長であった藤井少佐がいた。このとき困った事態が起きた。水道を止められたのだ。寺院内三千人といわれる避難民、そのうち恐らく千人くらい子供がおり、その幾割かは幼児であった。便所は急造の溜穴式である。おむつの洗濯水が不足である。そこで翌日から市中の水汲場にもらい水に出ることにした。

十六日、もちろん一人二人の外出は危険である。そこで藤井少佐が引率して代表何十人かで出掛けた。ところが、少佐が軍服を着て出たためにソ連軍につまかり、そのままいずれかに連れ去られる。水汲隊は一応帰ったが、もううっかり外に出られない。我々警備隊も銃を持ってはいるが、軍服ではいかんと皆、それぞれ民服を探して着替える。私は寺の倉庫にあった将校の平服ズボンをはき、上は縮みの半袖のシャツを着る。そして昼夜交代で境内の巡回警護を続ける。

ここに来て幾日か、大隊長外何人かの将校が訪ね

てくる。部隊はあれから、駅から移動してしまい、ソ連監視下に置かれ、自由を束縛されていると言う。訪ねて来た人達は家族がここにいる人達であった。佐藤大隊長は夫人と子供二人、谷口曹長は夫人と子供であった。お互いに安否を確かめ合って少時で別れて行った。

難民の中に小学校低学年くらいのかわいい少年がおり、私に懐いてきた。親は私達の連隊の連隊本部付主計の藤沢中尉であった。私も部隊にいたときお会いしたことがあるので何か懐かしく、少年の遊び相手になり、食料庫から甘味品を持ち出して、くれてやったりした。小さい妹さんがいたが無事帰れたかどうか。

十七日、水は依然として不自由である。そこで境内にあった使われていない古井戸を掘り起こすことになる。れんが造りの二メートル角くらい、深さは五、六メートルの所まで埋まっていた。それを手送りで底の土をさらい出す。何時間かするとれんがの内枠が出てきた。皆「それ」と喜んだが、しばらく掘るとまた下に小さい枠が出た。結局それは、水が深い所にあるの

で幾段かにつないで掘ったものとわかる。

十八日、昼夜兼行で掘ったが水の出る所まではいかない。遂にあきらめられる。この日、市中に点在する一般避難民に食糧の配給に出る。主に小学校等に分宿している開拓団関係の人達に米麦や高粱を分けるのだ。ある学校で会った人達はもちろん婦人ばかりである。男は徴集されて一人もいないところへソ連軍の侵入である。馬車に出来るだけの荷を積んで逃げ出したが、途中満人の襲撃を受けたり、だんだん重くもあり捨てて、ハルビンに着いた時は空同然であった。しかも開拓に精根尽くして、ようやく今年に思うような収穫ができるかと思つたやさきの開戦である。泣き泣き訴える女達のホコリにまみれた顔は、敗戦の悲惨さをまざまざと見せつける。

十九日、街が騒がしくなつたと思うと、いよいよソ連軍の進駐である。朝から空には単葉低翼の戦闘機が縦横に低空飛行の示威を行っている。我々もソ連軍の命令で武器を近くの広場に持つて行く。お寺の物置に軍刀も幾振か隠されていた。それらを担いで行くと、

中には鞘から刀身が出ているのもあるとソ連兵が身を引いて怖がる。しかし彼我の兵隊が交戦していないので余り感情的に対立意識がない。それが終えた頃、お寺の前の道路をソ連軍火器、戦車等の行進が始まつた。大変残念ながら日本軍には見られない巨大なものばかりだった。

ソ連侵攻以来雨がなくついに水道も止まり、寺院内の衛生面でようやく不快感が高まり、乳幼児の発病、そして死者が出始めた。室内いっぱい身動き出来ぬ状態で、伝染病患者の出現は不安を募らせたがいかにともしがたい。その夜突然豪雨となる(日時を覚えていなかったが、最近の文献で十九日夜とわかる)。皆欣喜雀躍して、あらゆる器に雨水を受ける。しかしそれは恵みの雨であつた反面、伝染病誘発の魔水ともなつた。単に洗濯用にもみ使用したなら良かったが、つい口に入れる者がおつたのだ。この日から赤痢ほかの病気がたちまち広まってきたのだ。しかし、その地獄のしょうけつを見ることは我々にはなかった。

二十日、早朝、我々が朝食を終えて室内で休んでい

ると、突然ソ連兵が四、五人、軽機銃を擬しながら入って来ると、すぐ出ると叫びながら、アッという間に引っ張り出されてしまった。着の身着のままとはこのことで、若干の身の回り品を入れた雑のうをつけることもできず、縮みの半袖シャツにバンドもないズボンをはき、麦わら帽子という、何ともしまりのない格好で仲間と一緒に正に捕虜生活第一歩を踏み出す。

そこからヘルビン郊外の新香防駅まで、どこからか駆り出された民団何百人と共に真夏の道路をロシア兵士のダワイ、スカレー、ブイストレーの叫び声に叩かれんばかりに追い立てられ、沿道の民衆からはあらゆる罵声を浴びせかけられながら、時には物を投げつけられて引かれて行った。

その途中、別の組とも出会う。女達は身を守るため、多くは坊主頭になって顔も汚している。中には別の組と知り合いに行き会い、必死に声を掛け合って無事を告げながらお互いの前途を案じ、涙で別れて行く者もあった。ここへ来てようやく敗戦の惨めさが身にしみて感じられ涙が出てくる。街を抜け飛行場の脇を

通り駅構内に集結させられたときには皆くたくたであった。今日は朝連れ出されてから夕刻まで、水を飲む間も与えられず引っ張り回された。ヘルビン市中の各所から我々同様連れて来られた民間人の団体の集結地としてここが選ばれたらしく、兵隊の姿は見えない。

夕食も与えられず、この夜は各自野天にねぐらを求めて寝る。私は、大きな枝を張って太い根を八方に伸ばした木の根方に、そこで拾った剣道の防具の竹胴の壊れたのを敷いて、体の上に葉のついた木の枝をかけて寝る。時期が盛夏の八月でよかった。もし二カ月前後していたら、日中の気候はちょうどよい気温でも、夜に入れば大陸の気温は急低下して、とても我慢できない状態ではなかったろう。

なかなか寝つかれない。部隊とはこれで縁が切れてしまったのだろうか。入隊以来十カ月、苦楽を共にした上官、戦友と、一は興安嶺で別れ、今またアッサリ貨車を飛び出し東本願寺別院の警備に行ったため、はじき出されたように、たこの糸が切れたように、見知

らぬ民間人の中に紛れ込んでしまった。これからどうなるのか、日本へ帰れる日はいつになるか、うとうとしているうちにそれでも少しは眠ったらしい。

二十一日、朝が来ても点呼はない。することもないので食料探しにぶらつく。今ここに何千人いるか知れないが皆腹をすかしている。皆何か口に入れるものはないかと右往左往している。私は先人のためにきれいに踏み荒らされた畑に入ってみる。一面平らになった土を少し掘ってみる。所々をつつついているうち、ついにあつた。白いネギの根である。鉛筆ほどの太さで二寸くらいあつた。急いで拾うとズボンで土を落としか口に入れる。甘い味がジィーと出る。嬉しかった。今でも忘れない。しかしそれだけだった。その辺をぶらぶらしていると病院関係の人（患者だったのか、衛生兵だったのかわからない）が私を見て、縮みの半袖シャツ一枚と縄のバンドのズボンの姿が余りに惨めに思ったのか「それでは困るでしょう、これを着たら」と、裾の長い白の病衣をくれた。親切な人もあるもので、早速ありがたく頂戴して上に着ると裾をまくり上

げて腰に巻きつけた。頭には昨日からの麦わら帽である。

有刺鉄線の仕切りに近づくと、外から満人達が果物やパン等売りつけに来る。それをソ連兵が追い払う。彼等ソ連兵の態度は日本人に対しての方が友好的である。時々満人に対して威嚇射撃をする。自動小銃は射程は短くかつ力も小さいが、何と言っても機関銃であるから危険である。もし彼等と戦っていたら突撃時の損害は此方の方が多かったらうと思う。飛行機にしろ、移動銃火器にしろ、あるいは小銃にしろ、日本軍の装備とは格段の相違である。とても大和魂で補てんできる格差ではない。肉弾攻撃等、小手先の戦術は大局の決定を多少遅らせることはできたかも知れないが、勝敗を左右できるものではないと感じた。興安嶺出陣の折は爆雷による肉攻班に編入されて、一週間ともたない命と覚悟したとき、思ったことは「我々は国の為に死んでいくが、内地の肉親はどうか幸せに暮らしてくれ」ということだった。しかし頭の大部分では、この戦争は勝ちっこない、いずれ内地も戦場とな

る、その中で果たして「幸せな生活」が望まれるだろうか、答えは「否」である。しかし、そこまで考えるのが恐ろしい、無理に途中で思考を打ち切って「無事に暮らしてくれ」と祈るだけだった。

今、敗戦となり捕虜となって無為の毎日を送っていると、明日をも知れぬ境涯の中で考えることは、いつ、どうして内地に帰れるかということと、何とかして口に入れるものを手にしたいということのみであった。

二十二日、昨夜は急造の幕舎に寝られた。夕食も僅かながら配給があった。何時頃だったか、ソ連将校の巡察があった。日本刀の抜身を杖にして、しかし笑顔で愛想よく皆に向かい「皆さんとは戦争を七日したただけだ。我々は友人である。これから力を合わして悪い中国をやっつけよう」と言った。つまり彼等の目標は蔣介石の追い落としにあるのだ、ああそうだったのかと合点する。

午後になって乗車命令があり、無蓋貨車に乗り込む。行き先はわからない。見知らぬ山野を列車はノロ

ノロ走る。所々でソ連軍を見る。機械化兵団が先頭に立って進軍しているようだ。沼地に土を入れ山地を切り開いて道路を造っている。大型のブルドーザーが何台も動いている。鉄道に並行した道路を、戦車が大きな石塊をキャタピラーで巻き上げながら走っている。

広い平原のかなたに小山のある地点では、重戦車が何十台と並んで実弾射撃をやっていた。曳光弾が長い放射線を美しく描いて小山に吸い込まれて行く。あのようにされていたら大変だったろうなと思う。一面波という駅を通る、ここでようやく列車が牡丹江を指していることを知る。

二十三日、真夜中、横道河子オウドロウガシに着く。駅の周辺にぎやかである。音楽が流れ、野外で映画をやっている。此方でソ連兵が群れて騒いでいる。その中を我々は列車から下ろされ、直ちに行進に移る。何か山の上から曲がった坂を下って行く。どこへ行くのか依然としてわからない。何列だったか覚えがないが、とにかく縦隊を作って、その両側を五十メートルくらいおきにソ連兵が付き、進む。多勢の中には病人もおおり、歩

行困難な者も幾人かおり、少し遅れると、ダワイ、ブイストレー、と銃を擬してせかせる。皆いまいましいやら、口惜しいやら、情けないやら、くそっと歯ざしりしながら、いかんともしがたい状況。

この中であつて、我々軍人、兵隊の感情の中には、この戦争は貴様らソ連に負けたのではないぞ、アメリカにやられたのだ、ロシア人なんかに負けるか、火事場泥棒奴、という思いがわいて、皆一様にソ連兵をさげすんで見ていた。それは進駐して来たソ連兵が余りにみすぼらしい姿であつたからである。また、その姿のごとく、行為が何とも下劣であつたからであつた。勝ち誇つた軍隊にしては、やたら我々の持ち物を欲しがり、略奪をほしのままにする。おかげで目ぼしい持ち物は皆取られてしまった。中でも腕時計を一番欲しがり、一人で何個も集めていた。また、ほとんど文盲で、一体国にはどんな暮らしをしていたのだろうかと皆不思議がる。そんな乞食同然、野蠻極まる兵士ではあつたが、直接我々の身体に触れるような暴力は禁じられていたらしく、威嚇はしても打ちたたくこと

はほとんどなかった。

立木の茂る坂を下りる途中、片側の沢の中に日本兵の死体が打ち捨てられていた。皆顔を見合わせながら歩く。林を抜け裸山のスロープを下る。道端に火砲に使う黄色葉が散乱していた。短冊形のままのものや粉末状のものが所々に落ちてゐる。開戦時、我が軍が捨てたのだ。何十キロ歩いたのだから、やがて山の間は広がって耕地が見えて来る。トウキビやひまわりが畑いっぱいになつてゐる。しかし道に沿つた所はほとんど実がない。先に通つた者達が採つてしまつたのだ。

それでも素早い者が歩哨の目を盗んで採りに入る。しかし所によつては満人達が警戒してゐて、見つければ命道具だ。途中小休止して昼食となる。しかし配給はコウリヤンが正に一握りだ。それを手缶の蓋をキレイに取つたものに入れ、たき火にかけて炊くのだ。こういう炊事をするようになったのはこの日が初めてだつたらう。昼食を終えるとまた出発。だんだん山間は開けてくる。水田地帯に入る。稲は大分育つて内地の田園風景を思い出させる。何町歩くらいずつあるのか、

中心に土塀で囲まれて住宅がある。整然とした造りだ。開拓団なのか、満人部落なのか、人は見えない。そのような状況のまま夜になる。木も何もない道端で思い思いに横になる。夕食は付近の畑からトウキビを五、六本採ってきて食べた。一度にこんなに食べたことはその後も一度もない。

二十四日、翌日また行進が始まる。皆疲れきってはいるが、あきらめきって黙々としてほりの中を進む。しかし、老人や子供連れの人達は大変つらい行進であった。ほとんど各地からの寄せ集め民間人であるため、行進以外勝手気ままの行動である。皆、気負った一旗組の渡満者達であるから鼻っ柱の強い者が多い。まだ争いはないが、いつかはもめるときが来るかも知れないなと感じる。昼頃になって目的地に着く。海林ハイリンという元の病馬の治療所であると言い、元の馬房をそのまま使って、馬一頭の仕切りの中に乾草を敷いて四、五人ずつ寝る。食事は相変わらずコウリヤンや麦が一握りほどで、手缶で炊く。ここには先着、後着、何万の人が詰め込まれてごった返していた。当然

水が不足して炊事用の水を得るのに大苦勞。私は土手の溝のしたたり水を一晚がかりで飯盒に受け、炊事用と飲料用に充てた。もちろん生水を飲むことは満州に来てからは絶対に禁じられていた。ただ深井戸の水はよい所もあったようであるが、まずは用心が第一と私は絶対に飲まなかった。

二十五、二十六、二十七日、ここに着いて三日目、周囲の人達との交際はほとんどなかった。ただハルビン東本願寺警備兵の仲間だけが話し相手で、毎日ぶらぶら構内を歩き回り、知った者はいないかとのぞきしてゐた。

二十七日、この日、付近を歩いていると、軍服を着た兵士に「オイ藤田」と呼び止められた。見ると本部中隊の戦友である。部隊も来たのだ。聞けばハルビンから大部分を歩いて来たとのこと、我々より三日も遅れての到着だ。部隊へ帰って来いと言われる。私も民団の人達と数日付き合ってみて、どうもなかなかに解け合えないものを感じていた。特に昨日宿舎を移動したとき病気で動けない者が二、三人いたが皆、見捨て

て出てしまった。もちろんどうにもならない状態ではあったが、兵隊だったら何とかして連れ出したであろうと思ひ、この人達とは別れて再び部隊の仲間に入るべきだと決心して、戦友について行く。今着いたばかりの部隊は、大隊長初め各中隊長等將校を中心に草原に腰を下ろしていた。私たち本願寺派遣班二人（各自所属班に帰ったので本部中隊は二人なのだ）が各班長、隊長に帰隊の申告をすると、將兵皆、私達の服装、特に私の麦わら帽に病衣の裾をたくし上げてズック靴という姿に大笑いして、しかし一人の班長が軍衣の上衣を、もう一人は戦闘帽をくれ、佐藤大隊長がズックのベルトの新品を「内地に上陸するまでこれを使っていよ」と貸してくれた。こうして十余日ぶりに元の仲間に入り、別れてからの出来事をお互いに語り合った。

部隊の方もハルビンで拘束され、武装解除を受け銃器は一切取り上げられたが、將校の軍刀は携帯を許されていた。行軍？の途中、我々同様略奪に遭ひ、いろいろ奪われたが、大隊長が立派な長靴をはいているの

に目をつけ、それを取ろうとしたので將校達が軍刀を抜かんばかりに駆け寄ると、驚いて逃げたという。それから大隊長は長靴に泥を塗っているという。

考えて見ると、開戦以来、私はまず当初残務整理班として本隊から残され、しかし、興安嶺へは汽車で二日早く着き、山と一緒に出陣したがハルビンで東本願寺警備に出てまた置き去りにされ、それが捕虜になってハルビンから海林までほとんど汽車で送られ、本隊より三日も早く現地着という状況。山を出るとき石川副官が「今度の作戦は行軍が多いからお前では無理だ」と言われたが、事実、もし本部隊と終始行動を共にしていたら参ってしまったかもしれない。「人間万事塞翁が馬」という言葉がピッタリの経験に、人間一人、バタバタしても仕方がない、流れにまかせて暮らす以外ないと悟る。ただ、そうは言っても、興安嶺を出る時のように一度は自らの運命を自分で選択する権利は留保したい、しかしそれも結局は運命である。運命とは目に見えないレールの上をたどるものなのか、あるいはまた行き当たりばったりの瞬間の連続な

のか。

シベリア抑留体験記

山口県 小曾根 三郎

生い立ち

長崎市小曾根町の本籍地で、大正十（一九二二）年二月十三日に生まれました。

長崎では旧家で、比較的裕福な家庭環境で過ごしました。

県立長崎中学校を昭和十三（一九三八）年に卒業し、昭和十五年に旧制佐賀高等学校に入学、十八年に同校を卒業し、同年九月、九州帝国大学工学部航空工学科に入学しました。

しかし、学制改革によって学徒動員の対象者となり、本籍地が長崎市のため、大村四十八連隊に入営、同年十一月に、満州国牡丹江省東寧村にあった国境守備隊の重機関銃中隊に配属になりました。

その後、乙種幹部候補生を経て伍長に任官し、二十年五月に吉林市第五〇二部隊司令部付となり、倉庫班長を務めました。

二十年八月九日、司令部は出動し、留守部隊倉庫班班長、八月十五日、司令部倉庫内で終戦の詔勅を聞きました。

八月下旬、本隊は敗走状態で復帰し、九月上旬、ソ連軍進攻と共に無抵抗で降伏し、武装解脫を受け、司令部を明け渡し、ソ連軍の指揮下に入り、千人単位に部隊を再編し、天幕野営に入りました。

当時、司令部通訳からの通達によれば、日本軍は、不穏な動きがなければ、順次、帰還船により日本に送還するということでした。ソ連の監視兵も異口同音に「ヤポンスキー・トウキョウ・ダモイ」と言っていて、既に始まっていた予定された各地の収容所宛のピストン輸送について一言も触れず、見事に言論統制がしかれていました。

スターリンは、ドイツがポツダム宣言をのみ無条件降伏をした翌日、日本軍捕虜規定を制定し、日本軍が